

協議の視点

* 「問い」は焦点化されているのか。

模擬授業リフレクション

模擬授業後の協議では、「同じ任意単位が必要であるということに気付かせるような流れになっていない。『長さ』のときの考えを生かして、『広さ』の場面でも考えていけるような流れが必要ではないか。」「折り目への着目が弱かったのではないか。」「問い」が子供の問いになっていないのではないか。」などの意見が出されました。

子供が無自覚的に経験していることをベースに単元をつくる

私たちは量の単位や測定の意味を指導する際に、直接比較→間接比較→任意単位による測定→普遍単位による測定のプロセスが大事であると思ってやってきています。しかし、子供の生活経験というのは、必ずしもそれに縛られてはいません。子供の生活経験からすると、広い方を選ぶときなどは、任意単位を使って大小比較をしている経験は多くあります。こういった無自覚的な子供たちの経験をもとに、単元をつくっていくことが、特に低学年の算数の授業づくりでは大切です。



専門官による指導板書



“問うべき問い”を見極める



「問い」が不在の授業では、子供は脳みそに汗をかきません。稚拙でもいいから、「今、自分たちが言いたいことはこういうことだ」ということを、汗をかきながら表現し合う場（数学的コミュニケーション）がないと、授業として価値の低いものとなります。

本時で重要なことは、「単位」です。なぜ、「8つ」と「6つ」で判断していいのかを考えることが今日の授業です。

「単位」とは、大きさを表すのに用いる、基になる大きさのことです。したがって、おさえるべきポイントは、基になる大きさが、ぴったり重なる同じ広さのものだから、それが「いくつ分あるか」という数字だけで比較できるということです。そのためには、「広さ」の学習において、「長さ」のときにブロックなどを使って、ぴったり重なるもの（単位）の乗法的表現（いくつ分）で測定した経験を想起させ、「見方・考え方」をつなげることが大事なこととなります。

つまり、「なぜ、単位を使うことによって、大小の判断ができるのか」、「問うべき問い」を見極めることが大切です。

模擬授業から見えてきたこと

「何のために教科を学ぶのか」という問いに対して曖昧な答えをもっていました。

同じような比較の仕方をするからといって、同じように子供に教えるのではなく、その教材の質を見極めて、単元をデザインしていきたいです。そして、単元をデザインすることが、教師の自己満足になってしまわないように、子供が生活の中で無自覚に行ってきたことを、子供の思考にそって、算数の世界にのせてあげるプロセスをつくってあげたいです。



中屋 美晴 教諭

参加者の声

- 教科書に使われるのではなく、子供の経験をベースにした単元づくりを実践していきたいです。そして、単元づくりを支える「勘どころ」を磨いていきたいです。
- 「何のために子供は教科を学ぶのか」を考えながら、それにいかに答える実践になっているかを問い続けることの大切さを学びました。

- 単元デザインの大切さや構成の意図をしっかりと考えておくことの重要性を改めて学びました。「誰のためにこの活動を仕組むのか」を意識して、授業構成をしていきたいと思います。
- “問うべき問い”を見極めるようにし、“子供の脳に汗をかかせる問い”を考えていくことの大切さを学びました。また、特に低学年は、無自覚的な経験を価値付け、そのことをベースに単元を考えていくことの大切さも学びました。

check!

子供の期待に応える学びをともに作りませんか

受付 12:55 西体育館

次回 平成 30年 11月1日(木) 授業研究会 13:10から 1年『大きさくらべ』-ひろさをくらべよう-